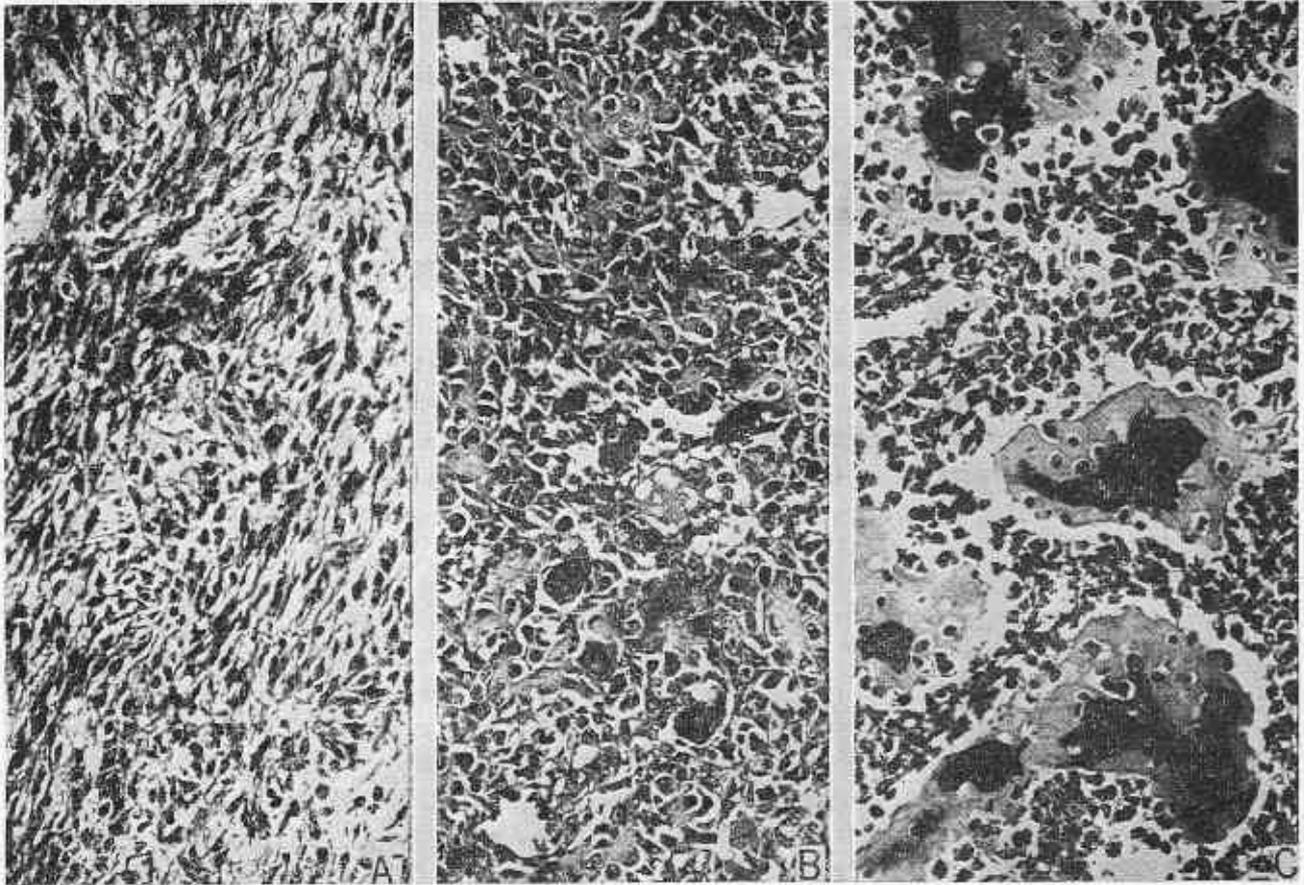


再発のたびに異なる乳房腫瘍

鹿児島大学農学部家畜病理学教室出題・第5回獣医病理学研修会標本 No. 66



犬，13才，シェパード，♀の腹部皮下に大林窩大の腫瘍が発生，昭和33年3月5日日本学家畜病院にて手術によりこれを剔出した。約2カ月後同様の腫瘍が再発し，これも手術により5月10日剔出した。この腫瘍は前回の腫瘍より5cm程離れたところに発生し大林窩大であつた。約4カ月後前回の腫瘍より約5cm離れたところに同様の小児頭大の腫瘍が発生した。犬は甚だしく衰弱し同年9月10日斃死した。剖検により左右の肺におのおの1コ鶏卵大の転移性腫瘍が認められた。初発，再発，再々発肺転移腫瘍は何れも灰白色，柔軟，限界明瞭で断面には壊死および出血が認められる。写真Aは初発腫瘍の組織像である。腫瘍細胞は概して紡錘形，大小長短不同で核はクロマチンやや豊富，細胞の配列は密で束状をなし，その方向は不規則に錯走する。腫瘍細胞は大体において線維芽細胞に一致する。上述の所見から初発腫瘍は紡錘形細胞肉腫と診断した。再発腫瘍（写真B）はクロマチン豊富な円形あるいは楕円形の大小不同の細胞が密にならんでその中に多数の核をもつ巨大細胞が散在し（写真

ではほぼ中央に数コ見える）更にところどころに骨様組織の発生（写真では淡明なところ）が認められる。腫瘍細胞は骨芽細胞，骨細胞および破骨細胞に一致する。骨肉腫乃至巨大細胞肉腫と診断した。再々発腫瘍（写真C）および肺転移腫瘍の腫瘍組織はほぼ同様で腫瘍細胞はクロマチン豊富な円形，楕円形の大小不同の細胞が密に列んでその中に骨様組織の発生が顕著で石灰の沈着もかなりみられ骨肉腫の組織像である。

以上の如く腫瘍細胞が再発に従い線維芽細胞より骨細胞へと変化したことは極めて興味深い。これについてもつとも考えられることは線維芽細胞より骨細胞への化生である。なお腫瘍の発生母組織について考察するに皮下乳腺の間質と思われる。その理由は犬の乳房は種々な腫瘍の好発部位であつて本腫瘍組織像にもとところどころ乳腺の細胞が包みこまれているのがみられる，また初発腫瘍（写真A）の腫瘍細胞は線維芽細胞に似ているから母組織が乳腺間質結合織と思われるからである。